



## 本トの川越

---

本川越の駅はペペの建物と一体化していてそこに入り込む形になっている。地上なのに地下鉄の駅に入ったように一瞬錯覚する。

駅というものはそうは変わらないなと思った。川越市駅の方への近道ができたことは大きいけど、駅の中は何十年とほとんど変わりが無い。

後輩のくせに人を待たす吉川のせいで、駅前をじっくり見る時間ができてしまった。

東口を出ると、さすがに少し違っていた。駅前のビルが一つなくなって歯が抜けたみたいになっている。

駅前のバス乗り場を見ると、路線バスに混じっていかにもな感じのレトロな周遊バスも走っている。乗客はガイドらしき冊子を持つてて人が多かったから、観光客向けなのだろう。

学生の頃はここと川越駅を結ぶ道くらいしか川越として認識していなくて、買い物やゲーセンの為の場所ではなかった。本川越駅から見る川越はただの地方都市だ。二十代までの私にとっての今までの川越だ。

「いやあ。すいませんすねえ」

古川はこういう奴だ。言葉は謝っていても顔も声もにやけていて、全然悪そうにしていない。

埼玉でも北部育ちのこいつは川越なんてほとんど行ったことがなかったそうだ。埼玉は狭いようで広い。そのせいで今日は男に観光案内する羽目になった。

「案内される方が遅れるか、普通」

言っても無駄でも言わずにはいられない。いや、言っても刺さらないような奴だから、気兼ねなく言えるのかもしれない。

「一回起きたんすけどねえ。やっぱ休みの日

だからまた寝ちゃったんすよ」

古川とよく話すようになったのは会社が一緒に住んでた場所も一緒だったからだ。会社が勧めてくれたアパートに素直に従うまでは一緒だったが、俺が腰掛けですぐ辞めた会社に古川はそのままずっと勤めていた。

フリーみたいなもんになってしまったから、お金はないが時間はあった。そんな状況じゃなければ、古川のお願いに乗らなかっただろう。

観光地としての川越を一度ゆっくり歩くのも悪くない。一人じゃそんなことしないから、うざったい後輩でも役に立ちようがあるもののだ。

昔一度か二度行った川越祭りでは、駅前の十字路とその近場までしか行ってないように記憶してる。その少し先くらいまでは行ったかもしれないが、たぶん時の鐘は見えていない。見たのか覚えてないという存在感のなさが川越のシンボル、時の鐘だ。

よく川越に行ってたのは高校生までだったし、社会人になってからも川越祭りに行ったくらいだ。その時は人混みの密度にたじろいで、じっくり川越を見たという覚えはない。

「川越いいすねえ」

相変わらず適当なことを言う奴だ。今日、俺達が見たいのはこの先のところで、そこがたぶん最近観光地としてそれなりに盛況らしい川越だ。今いるこの川越はそれではない。

「観光っぽいところ行きたいんだろ？ こっちだよ、こっち」

調子のいい古川を置いてくようにとととと交差点へ行く。このへんが俺が知ってる川越だなと独り言を言いながら交差点を渡る。ここってスクランブル交差点だったっけか。これは声に出さず、心の声で呟いた。

驚いた。

駅から観光地へとつながるこの道は普通の道だったはずだ。それが一車線分、道が広がっている。文字通り開けた。道路を拡げた道の反対側は新しい建物におしゃれなカフェが並んでる。そんなにカフェが必要かと思うくらいカフェがあるが、それだけこの道を通る人が多いのだろう。

一本横の道を行こうかと思ったが、開けた道の方がいいだろうと思い直して、そのまま駅から離れていく。やはり今回は小観光は新しい川越を見るべきだ。

一軒だけ昔っぽい構えの建物があった。こういうのを蔵造りというらしい。古川はのんきに歩いてるだけだ。こいつは蔵造りの建物に気づかないんじゃないかと不安になったから、わざと一回立ち止まってみた。古川はやはり何も気づいてなかったようで、いつもどおりのなんにも分かってない顔している。そんな顔は放っておいて、和の店なのにあるショーウィンドウに目を向ける。

民芸品屋らしい。このショーウィンドウで唐突に思い出した。この店の前を歩いたことがある。昔、川越祭りの時はこのショーウィンドウにお面が置かれていたような気がする。フィクションの中でよく見る狐のお面だ。

売ってる物はどれも本格的だ。値段はついてないが高いに違いない。蔵造りの店構えが非日常で、売っているものの伝統が三割増しになってる気がしてしまう。

三十になったけど、月収は年齢の万倍に届いてない。あのまま会社に残ってたらもう少しもらえてただろうが、性的にずっとはやっていけなかったから辞めたのだ。そんなたればは意味がない。

きっと隣の能天気男の方が三十になった時に稼いでるだろう。いや、もう今の俺よりもらってるのかもしれない。あういう生活が続けられるのも一つの才能なんだと素直に思う。社会に順応する力というのかな。俺にはそれが乏しい。だからはっきりした夢もないのに会社を辞めて、フリーといえるんだかいいないんだかな暮らしをしてる。

仮面を被らない人生を歩いてるつもりだが、そう言い切れる自信はない。上等な狐のお面でも被って生きてられればそれもまたいい人生だと思うが、それもできなそうだ。

「これが蔵造りってやつだよ。この先行くと

こういう家しかないところに出るはず」

「へー、すごいですねえ。今からテンション

あがりますね」

古川の反応は単調だ。単純な機械みたいだ。いつかA I 旅行パートナーみたいなものができたら、古川とはもう一緒にどこにも行かないだろうと近未来に期待した。

もう二十年以上前から川越に行ってるのに、いや、それだけ長い間行ってるからか、川越の蔵造りの町並みを歩いたかどうか記憶がはっきりしない。このあたりの何軒かある蔵造りだけで蔵造りを見た気になっていたのかもしれない。

この先の川越が自分があまり知らない本当の川越なのだ。そこがいつの間にかいっぱしの観光地になっているという。それが今の川越なのだ。

観光地に一人で行くのは勇気がいる。明るさと騒がしさが取り柄だけの奴はうってつけかもしれないなと古川を見て少しだけ思い直した。

しかし、このへんは変な場所だ。道路を挟んだ向こう側は新しくて今風。しかもどこか外国っぽい。こちら側はところどころに昔からの店があって、歴史がまばらにある。車はけっこう走っててすぐ後ろには駅があり、現在の街でもある。ぐちゃぐちゃだ。

一ブロック歩くと目立つ店が見えてきた。

この店には見覚えがある。角の目立つ店だったが、道が変わり隣の建物もなくなったことで、通りにこの店が浮いてるみたいになっている。

窓から見えるアンティークが目立つ店だったが、何の店か知らなかった。よくよく見ると小さく『ランプ屋』と書いてある。やたら多い窓からはランプだけじゃなく色々な置物が見えたから、小さくランプ屋と表示するのはこの店の実態に合っている。

「せっかくだから入ってこうぜ」

古川の応えを聞かず、ランプ屋に入っていく。

置物は高いものから簡単に買えるものまで様々で、高いのと安いとの違いは全く分からない。分かるのはこの店の売り物がとんでもなく多いことだけだ。おかげで見てるだけで楽しめた。

この店は中も外も無計画で混沌としている。でも、それがこの場所の魅力になっている。人生はこうはいかない。少なくとも俺のは。

まっすぐ道を歩くだけで本当の川越とやらに着くはずだ。確か、このあたりに昔はアニメイトがあった気がする。高校生くらいのころか、何を買うでもなく物見遊山で来た記憶がある。昔の俺にとっての観光だった。今はインドカレー屋になってる。さっきのカフェやランプ屋と同じく、ここにも外国だ。小江戸というわりには節操がない。

このへんは駅に近いでもなく、大通りにあるでもなく、不思議な場所にあったものだ。ひょっとしたら記憶が間違ってるのかもしれない。

あのころの俺は核というものがなくてフラフラしていた。将来これになりたいなんてものが欠片も見えてなかった気がする。本当に好きなものもなく、探してるような探してないようなでふらついていた気がする。あのころよりは自分が定まってるようにも思えるが、年齢相応にはまだまだ遠い気もする。

「ちょっと一本横に行くぞ」

古川は事前に下調べをするような奴ではないから、こっちがツアーガイドをしなければならない。まあ好きに歩けるということでもあるのだけど。

一本脇にそれると大正浪漫街道という通りに出るらしい。そんな通りいつからあったのだろうと事前に調べてしまったが、二十年程前から少しずつできたらしい。自分が川越に詳しくなっても仕方がないのだが、つい調べてしまった。ネット社会だ。

大正浪漫通りは急に広い石畳の道になって、明らかにそれまでの道と違うので、気分を上げやすい。古川はそうでなくても上がる。やはり観光の相手としてはけっこう適任な奴だ。

大正浪漫通りなのに、入ってすぐのところになぜか神社がある。そりゃ大正時代にも神社はあっただろうが、なんともいいかげんだ。

熊野神社だ。提灯にはサッカーで見た鴉のマークがあしらわれている。

「せっかくだからここも見ていくか」

「はいっす」

観光にはこういう予定外の出会いを逃さないことが大事だ。三十年も生きてるとそういうことが肌で感じられるようになる。

何かの時期なのだろうか。それともいつものことなのか。神社の脇には洗濯物を干すように無数の白い紙が結ばれている。白いわりに中は見えないが、きっと紙の表にはそれぞれの願い事がかいてあるのだろう。こういうのを見るのも悪くない。

「お前、願いごととかあるのかよ？」

「みんな元気にとかそんなんすかねえ」

こいつは本気でこういうことを心から願ってるかもしれないから気持ち悪い。

俺の願いはなんだろう？ 自分でもよく分からない。強いていえば、今の暮らしでもうちょっとお金を稼げればという感じだろうか。いや、もっと何かある気がする。でも出てこない。願いごとを紙に書ける奴が羨ましい。

熊野神社を抜けると、確かに大正っぽい建物が多い。大正浪漫通りは小江戸という城下町の風情とは全く違う場所だ。大正というよりは三丁目の夕日のころを感じさせる軒並み。分かりやすく非現実的で、観光してる気分嫌にもなる。ただ、お店自体は観光客相手のものから普通の商店街のお店まであって、日常と観光がごちゃ混

ぜになってる。ひょっとしたらそれが返っていいのかもしれない。

「浪漫街道で思い出したけどさあ、例のあの

娘はどうなったんだよ？」

「ラインのやり取り続いてますよ。きっと脈

あります」

古川は決してモテるタイプの男ではない。むしろどうやったら結婚できるんだろうと思われる男だ。数少ないチャンスの大事さを意識するべきだと思うが。逆に自分の境遇の见えてなさが功を奏するかもしれない。自分が見えてるからいいとは限らない。

大正浪漫通りだって、ここが何を期待されてるかを考えていたらこういう町並みにはならなかっただろう。小江戸の情緒からここだけ急に三丁目の夕日なのだから。でもそれがいいアクセントになってる。

俺は自分が見えてる方だ。だから自分では面白みがない。

全く必然性がないが、浪漫通りの外れに沖縄雑貨屋があった。川越祭りの時には泡盛の試飲をやっていた記憶がある。

唐突に思い出した。ということは、俺は前にここまでは来ていたのだ。大正浪漫通りなんて名前は全然知らなかったが、知らず知らずに大正に行っていたみたいだ。

ちょうど飲みたい気持ちになっていたが、普段の日は試飲はやっていないようだった。どうして川越に、大正に沖縄雑貨屋があるのかはよく分からないが、どこで飲んでも泡盛はうまいのだろう。ただならなおうまい。

酒をよく飲むような人生でもない。自分にももっと節操がなければと思わないでもない。それかもっと節操があって古川みたいに道から外れない生き方ができたらよかったかもしれない。周りとか体裁を気にせず好き勝手やれる勢いがあれば。いや、そもそも何が好きでやりたいことなのか、未だに自分ははっきりしてない気がする。今はやりたくないこととして生きてるに近いようにも思えるが、やりたいことができてるかちゃんと聞かれたら分からないと答えてしまうだろう。

本当の自分なんてあるんだかないんだか。そんなことはこういう風にゆったり歩いてる時だから考えられることかもしれない。

沖縄雑貨屋の所の突き当りを左に曲がり、大通りに戻ってきた。ここらが観光地小江戸川越のメインの入り口といったところか。

なるほど。もちろん実物を見たことないけど、とにかくこれは江戸時代っぽい。

一階上部にも二階上部にもしっかりと瓦の屋根があって外観としては固いが、商店で一階の壁のほとんどがガラスで入り口も広く、柔らかくて入りやすさを感じる。のれんも柔らかさを演出している。

「すごいすねえ」

古川は本当に観光地向けだ。一緒に歩いて楽しいかは別だが、観光地に来たという意識を強くさせてくれる。

蔵造りの町並みに入ると人がどっと増えた。平日でも関係ないのか、休日だともっと多いのか。年寄りというには早い、退職はされているのだろうと思う年齢層が多い。きっと日本の観光地はこの年齢層の人達で埋め尽くされているのだろう。悪いことではない。いい人生ではないか。自分がああなれるかは分からない。

ちらほらと外国人の姿も見える。今は中国系の人も多いから、ぱっと見よりもっと多くの外国人観光客がいるのだろう。

川越に外国人がたくさんいる。二十年前を思うと不思議な感じだ。子どもころは外国人を見るのが珍しかった。それが川越にたくさんいるなんて。これが観光地になるということなのか。

「色々すごいすねえ」

古川は本当にボキャブラリーがない。

「お前さあ、もっと好きがあるとか何とか言えないのか」

まあ自分もそんなにボキャブラリーがあるわけではない。

観光に変な言葉はいらないのかもしれない。ただ見ればいい。ついでに写真も撮ればいい。まだ今日撮ってなかったが、蔵造りを一枚写真に収める。

ネットで予習した地図によれば、このへんに昔のままのりそな銀行の建物があるらしい。古川のテンションが上がったので、それが見えたのが分かる。

大きくて目立つ。そして周囲に不釣り合いだ。これは江戸時代ではない。積まれたレンガからは文明開化の匂いがする。いわゆる洋館というやつだ。年代を感じさせるくすみもある。フィクションの世界では殺人事件が起きたりするが、現実世界では保存対象だ。

明治かそれくらいからある建物。どうも今でもやってるようだ。レンガ積みの建物の入り口は自動ドアで、中にはATMも見えるのだから可笑的い。埼玉りそな銀行が明治からやってるわけではないので、元は何かの銀行で、今は埼玉りそな銀行だということなのだろう。

普通、こういう歴史的な建物は元何々という形なはずだが、ここでは現役の銀行なのだ。しかも埼玉りそな銀行。なんだか川越らしい。

川越はごった煮だ。江戸時代と明治時代と現代と、あとよく分からないものがごちゃ混ぜになってる。なかなかよくできた観光地のように見えたかと思えば、滑稽な景色が見えたりする。街全体を計画してつくったというよりは、あっちが勝手にこれをやって、こっちが勝手にこれをやってとそんなあちこちでテロのように街をつくったのだろう。そこに元々あった蔵造りの町並みを残すという土台があった。こういう行き当たりばったりは嫌いじゃない。

行き当たりばったりな証拠に、蔵造りの通りの店には統一性がない。明らかに観光客を相手にした店から店構え同様に伝統のある専門店まで様々だ。比較的スイーツ系が多いのはやはり観光地という感じだ。

芋のスイーツが多いのはなぜだろう？ 気になったらすぐネットで調べる性分だ。川越は昔は芋の産地だったらしい。今はそんなには採れていないようだが、ここには芋のスイーツが溢れている。

食べ歩きでも悪くないが、男二人でスイーツはなんとなく食指が動かない。いったい誰を相手にしてるのか分からない専門店の方が興味がわく。

全く買う気はないが、包丁の専門店は面白そうだ。きっと切れるであろう包丁がきっと買えない価格で売っている。ゼロが一つ少なくとも買わないだろう。完全に板前向きだ。包丁だけでなく、枝切り鋏やナイフなども売っていて、見ていて飽きない。こんな現役バリバリのお店も建物は文化財らしく、文科省の証書が目立たないところに飾られている。うん。川越らしい。

もう一軒の専門店が専門店でありながら観光客にも大人気という面白い店だった。その理由は一瞬で分かる。というより店より先に分かる。醤油を焼いたあの食欲を刺激する匂いが離れた所からでも分かるからだ。少しだが並んでいる人もいる。

その店は軒先で焼きおにぎり売っていた。でもおにぎり屋の類ではない。その店のかつお節の専門店だった。店の中にはなかなか見ない削る前のかつお節が売っている。これも高い。古川はかつお節を軽く叩いて硬さに驚いてる。そういうことをしたい気持ちは分かる。俺だって初めて見たかつお節削り機をさわってみたい。

この店はきっと玄人やプロ向けのかつお節専門店だったのが、川越が観光地になったことに乗じて観光客向けの商売も始めたのだろう。実に機転が効いている。さらに大事なのは、そこに観光客に媚びて自分のブランドを曲げるという嘘がないところだ。自社の製品でおにぎりをつくっているだけ。それだけで玄人相手の店が観光客にも対応でき、行列さえできているのだ。

こういう柔軟性が自分にもあったらなあと思う。この店の爪の垢というわけではないが、ぜひかつお節の焼きおにぎりを食べたかったが、あいにくこの日はもう売り切れていた。

本当うまくやっている店だ。

ここの角で一本曲がると時の鐘に出るはずだ。一番の目玉が一番の大通りではなく、そこから一本入ってすぐの所にある。真ん中すぎない感じがいい。

時の鐘はそれなりに高い建物だから近くに行けば分かるはずだ。観光はそういう分かりやすさがいい。人生の大半はそうじゃない。

蔵造りの通りの角から時の鐘がすぐ見える。

遠くで見てデカイものは近くで見てもやはりデカイ。古川が分かりやすいアクションで喜んでくれる。ひょっとしたら、この男の人生は観光みたいに分かりやすく歩きやすいものなのかもしれないなと一瞬だけ思った。

「時の鐘は最後にしよう。このまま蔵造りの道を行って、何ヶ所か回ってまたここに来るから。どうせまた駅の方に戻るしな」

古川は主体性がない男だから計画を立てないし、よほどのことがないかぎり人の計画に反対することはない。今日はそれなりに暑い、歩くのを嫌がるほどではない。

蔵造りの道は思いのほか短かった。この交差点の先は普通の道だ。ここが非現実と現実の境だ。

通りの終わりにはお茶屋があった。外から見ると冷蔵のケースの中に狭山茶コーラが入っていた。

家の近くでよく売っているものだ。所沢や入間でも売っている狭山茶コーラだが、さすがに川越まで狭山茶ブランドに入れてしまうのは厳しい。お茶屋さんだから売っているのだろう。

狭山茶とコーラを混ぜた狭山茶コーラは普通に考えたら絶対マズいはずなのに、不思議とうまい。そのままお茶とコーラの味がする。二つが混ざってうまいはずなのに、飲んでみるとなぜだかうまい。

狭山茶コーラのごちゃまぜでなんか違う気がするんだけど意外と成立している感じは、確かに川越と合っているのかもしれない。

蔵造りの通りを抜けて次に菓子屋横丁を目指す。車がブンスカ走ってる普通の通りを少し歩けばすぐまた非日常な小道に出会える。

菓子屋横丁は通りというほど大きくはない。普通の道から横に抜けてまた角を曲がると幹線道路につながる。そのL字の小道が菓子屋横丁だ。懐かしい駄菓子屋や漬物屋が並んでいる。ここも小江戸というよりは昭和の雰囲気の方が強い。まったくおかしい街だ。蔵造りっぽい建物が多いが、中には真新しい木造の蔵造りの駄菓子屋もあった。木の匂いは気持ちいいが、古くて新しいのは観光地として妙な居心地の悪さを感じる。

蔵造りの道からすれ違う人達が持ってたあれが気になった。それまででも売ってた所はあったが、お菓子の通りであるここで買うのがベストだろう。

今まで見たこともない長さの麩菓子を手に取った。バット程の長さだ。人を叩くのちょうどいい長さ。でも叩いたら折れてしまうし、折れてしまったら長いというこのお土産品の唯一の価値がなくなってしまう。

川越大黒棒というネーミングがなんとも絶妙に思える。要するに長い麩菓子だ。

買ってすぐに古川に渡す。あげるといえばあげているのだが、持って歩くのが面倒くさいからでもあった。

観光地にはお土産が必須だ。そこに行ったという証になる。別に食べてなくなっても構わない。そこで普段は買わないようなものを買ったということが必要なのだ。

この日本刀ほどの長さの麩菓子は間違いなく観光によるものだ。俺の知らないところでいつの間にか川越は観光地になってしまったらしい。

証というのは大事だ。俺には証がない。証が欲しいけど、証を手に入れる為に生きていたくはない。そこは観光に似てるかもしれない。観光だってお土産やお菓子を買う為にするのではない。ついでに買うものだ。この長い麩菓子が目的なんていくらなんでも馬鹿すぎる。



菓子屋横丁から出た幹線道路をしばらく歩くと川越の氷川神社に近づく。

確か氷川神社は大宮にあるものが総本社らしい。でも。すぐ近くの川越にもあって、川越の氷川神社もそこそこ名が知れている。

川越の氷川神社が有名なのは夏の縁結び風鈴のためだ。風鈴がたくさんあること以外はよく知らない。行っただけのお楽しみにとっておいてある。

氷川神社が近づくにつれ、浴衣姿の女性が見えるようになった。すごく夏だ。暑さとは別の部分の夏だ。

氷川神社は駐車場があって、結婚式場が併設している普通のちょっと大きな神社だった。だが、入り口に真新しい木材で組まれたアーチがあって、そこに無数の風鈴が吊るされている。様々な色のガラスの風鈴が並ぶ様は美しく、電気のいらぬディズニールランドみたいにさえ見える。何より涼しげだ。

さらによく見ると、風鈴には木の短冊が一つの風鈴につき何枚も結ばれている。一つの風鈴に四、五枚の願いごとと無数の風鈴なのだから、ここにはとんでもない数の願いごとが願われている。願望の固まりみたいな場所だが、悪い気はしない。人々の意思がここに凝縮している。

願いごとだけでなく、今ここにいる人もとても多い。賑わっている。西武線でよく川越や秩父の観光地の中吊り広告を見る。最近は季節柄、この川越氷川神社の広告を見ることが多かったが、この神社の人の多さを見るに宣伝効果は十二分なのだろう。

人は多いが神社は広く、暑苦しさはない。浴衣姿が多く、むしろ道路を歩いていた時より涼しい。小さな子どもも多く微笑ましい。

それでも願いごとを書く場所はそれなりに混んでいる。あの真新しい木の匂いのする札は同じく真新しい木で建てられた神社横の販売所で買えるらしい。

巫女というのはみな美人に見える。値段を見ると願いごとを買う札は四百円で買えるらしい。境内であれだけ札がぶら下がってることを考えると商売上手な神社だ。風鈴の方も売っていて、こちらは二千元だ。

「お前、縁結びの願いごとしないのかよ」

「いや、いいっすよ」

古川はこういふこの財布は固い。目に見えないものにはお金をあまり払わない男だ。分からなくはない。

俺も願いごとの札を買う気にはならない。だが、せっかくのなので、風鈴の方を買うことにした。今回の初めての買い物だ。信仰や願いごとは別として、これからの夏を風鈴の音色で過ごすのは粋で悪くない。

新しい木材で建てられた販売所は巫女さんが多くて、ここが最近に広く建て替えられたことを予想させる。それだけ最近訪れる人が増えたということだ。

さっきの熊野神社もこの氷川神社もそうだが、神社でありながら集客力を持って地域の観光に貢献している。しかも、神社としてのあり方を曲げずにそれを成している。

俺はこういう生き方がしたくて、できないでいる。自分らしさか生活かなんて子どもっぽい二択は考えてない。折り合いをつけて生きていければと思う。でも何が自分らしさかよく分からないし、どうしたら楽に生活できるのかも見えないでいる。割り切った二択もできず、ほどよい塩梅でも生きれていない。

とりあえず風鈴は買った。夏の間はこいつを見ながら、いや、聴きながら考えることになりそうだ。風の通り道に飾っておこう。秋になったら片づけて、覚えていたら来年の夏にまた出したい。

氷川神社から時の鐘に行く間にもう一箇所行きたいところがあった。川越のスカラ座という映画館だ。氷川神社から市役所の前を通って、蔵造りの道の一本奥をさらに歩いていくと、スカラ座に行く道が見えてくるはずだ。映画が見たいわけではないが、有名な単館系の映画館だ。ついで見に行く理由には充分だ。

スカラ座の道に入るには目印がある。道からではちょっと見つけにくいだが、スマホで地図を見ながらなので見つけることができた。

他の家と明らかに違うページュの洋館。一応洋館なのだが、見た目としては古風なアパートのようにも見える



。ハイカラさんの時代、明治や大正のスタイルだが、外装は新しく、それがまた場違いで目立つ。ごった煮な川越らしいといえばらしい。

「ここは今はやってないみたいなんだよな」

と、古川に言ってみたものの確証はない。

ちょうどその時に後ろから人力車がやってきた。蔵造りの通りや幹線道路でも遠くで見たが、間近で見るのは初めてだ。こちらも形は古いが、黒い客車部分が真新しく光っている。古くからのものだが、ここでの歴史は浅そうだ。

客席には浴衣の若い女性が二人。非日常な人力車にピッタリだ。車夫も足袋のようなものを履いていて、雰囲気がある。これが車も通る普通の道路を走ってるのだから、よくやるものだ。演劇かかっているとか仮装みたいでもあるが、そういう開き直りも観光にとって大事なのだろう。

全部は聞き取れないが、車夫は太陽軒の説明をしているようだ。さらに太陽軒をバックに写真まで撮ってくれている。人力車というのは運ぶ役割より観光ガイドの役割の方が大きいのだろう。日常から観光という世界へと案内しているようだ。

「人力車いいすねえ。江戸時代みたいじゃないすか」

人力車は明治からのものだが、古川へのツツコミは飛ばして、人力車がゆっくり走り去った後の太陽軒の入口に足を運ぶ。

驚いた。入り口にはカフェでよく見るようなメニューを立てかける看板があって、そこには最近つくられたであろうメニューが立てかけられている。

太陽軒もりそな銀行や蔵造りの店々と同じで、昔の建物で文化財みたいなものでありながら、普通にランチ営業してるのだ。文化財でランチ。とんでもない響きだ。

これは入ってみたい。しかし、入り口のメニューを見てすぐに考えが変わった。ランチの洋食セットで千八百円は高い。店の雰囲気からは妥当な額だろうが、俺達の雰囲気には妥当な額ではなかった。昼食に千八百円も払う余裕はないし、古川はランチを奮発したい相手でもない。

それに昼は決めた場所があった。でも太陽軒の中は気になる。

「中ちょっと見てみようぜ」

「え、ここ入るんすか？」

「違うよ。中をちょっと見るだけだよ。古川

だって中見てみたいだろ」

古川に開けさせようと思ったが、間の抜けた言葉に気が変わり、自分で扉に向かう。入り口の所が凹んでいて中に入っていけないと扉を開けられない。

そっと入って静かに扉を開ける。内壁は外壁より薄いページュで、窓が多くてとても明るい。スタンドグラスも何枚かあるようだ。テーブルにはしわのないテーブルクロスがかけられている。高価でないかもしれないが革張りの椅子。

何かの映画かドラマで使われたというの分かる。きっと昭和初期の洋食レストランはこうだったんだろうと思わせる。とても観光な眺めだった。

ここは古川と二人では入りたくない。別の誰かと食べるべき店だ。

高価だからでなく高貴な場所というのはあるのだ。そこに人を連れて来れるくらいの財力と、こういう場所を見つけるセンスを持っていたい。

店員が気づく前に、俺はそっと扉を閉めた。

太陽軒のすぐ隣にスカラ座はある。どちらかといえばこっちが目的だ。

こちらは何の時代錯誤もない。コンクリの平たい建物だ。「スカラ座」と書かれたネオンがなければ公民館か何かかと思ってしまいそうだ。

俺が知ってる他の映画館とは明らかに違う。映画館としては信じられないくらい狭い。公民館としても狭い。この中でどうスクリーンがあるんだろう。とても映画が上映できるような広さではないが、何やら音楽が聞こえてくるから今も上映しているのだろう。って、映画館って音が漏れるもんだっただけ。あらゆる意味で予想よりすごい場所だ。

上映ラインナップのポスターが貼ってある。一作はもう既にDVDも出ている映画のリバイバル上映。あとの二作は初めて見る単館上映系の映画だ。一本はどこの国の映画なのかも分からない。

こんな小さな映画館が、上映作品によっては多くの人が駆けつけ長い行列ができるらしい。映画好きにはとても有名な場所だ。

小さな映画館で特別な何かがなくても、ごく一部の人にかもしれないが、世に知られるものになれる。

街の外れの小さな映画館、スカラ座は俺をちょっとだけいい気持ちにさせてくれた。

スカラ座からは一つ道を曲がれば時の鐘の通りに行ける。

知らなかった。時の鐘は中に入って登れないのか。

行って初めて分かったが、時の鐘は神社の入り口の門みたなものだった。神社の門と物見櫓と鐘をセットにしたようだ。なんでかまでは分からない。門の方が有名になるのだから、未来というのは分からない。

行ったら写真を撮る以外に特にやることがあるわけではない。でも満足しないかといえそうでもない。そんなところが観光地らしい。人生もこんな方がいいのかもしれない。

「でも、ここって時の鐘は撮れるけど、時の

鐘を背景に記念写真って撮れないっすね」

古川はたまに鋭いことを言う。

時の鐘は今流行りの言葉でいえば、インスタ映えしない場所だ。離れたところからうまくやれば撮れないことはないが、自分と時の鐘をうまく収めて写真が撮れないのだ。

でも、それがいい気がする。観光地というのはどうしても写真を撮りがちだ。外国人観光客もちろほらいる川越を歩いて気づいたが、日本人がやたら写真を撮るといのは幻想だ。どこの国の人でも観光に行けば写真を撮る。自分と対象物をうまくフレームに入れて笑顔で写真を撮る。そこに来た記念。証だ。

でも、俺はそこに自分はいらないと思う。どこかに行っても、その風景は撮るが、そこに自分はわざわざ入れない。

自分が好きではないから自分を撮らないのではないかと自分で思っていた時期もあった。でも、じゃあインスタをしてる人達が皆、自分好きだろうか。そうではないはずだ。むしろ自分を風景で飾って、そこに映る自分を好きになりたいから撮っているのではないだろうか。

自分を好きになるというのは、そういう小手先のことではいけない気がする。場所で自分を飾らなくていい。それは場所にも自分にも失礼だ。

インスタ映えを拒否する時の鐘は男らしかった。

ここらで見えるものはだいたい見た。時間的にも飯でも食べて帰る時間だ。

店は決めていた。事前にネットでくだらないことを調べてしまった。目的の単語がのれんの文字にあった。のれんには一文字ずつ『川越ラーメン』と書いてある。

「ここにしよう」

古川は反対しない。古川は食事に気を遣わない方だ。外食するという時はマックとかすき家とかで適当に済ましてしまう。だから、観光地としてあんまりかしこまったものを食べるのには向かない。でも、どこでも食べれ

るものを食べては観光じゃない。ちょうどいいのがご当地ラーメンだ。

ガラガラではないが、混んでもいない店内。

これくらいがちょうどいい。

適当に座って、川越ラーメンと紫芋餃子を頼む。

話でもと思った矢先、古川はスマホを取り出した。誰かにラインをしてるようだ。

「例の女の子か。俺といる時でも小まめに連

絡とは熱心だねえ」

「向こうから連絡くれるんすよ」

古川に自分から連絡を取る女性がいるなんてにわかに信じ難い。でもいるんだから仕方ない。

「なんかいけそうな気がするんすよねえ」

こういうのはポジティブと言わずバカという。でも百回こういうことがあれば、一回くらいそういうことがあるかもしれない。そして今がその一回なのかもしれない。そうであれば、バカが正しい。

俺にはそういうバカさはなかった。感情に任せて判断したこともなかった。でも、何を感情より優先させてたのかははっきりしない。

本当の自分なんて分からないどころか、あるかどうか分からない。

今日歩いた小江戸、いや小江戸じゃないところもたくさんあったように思えたが、あの観光地としての川越が本当の川越だったのか。それとも他の何かが本当の川越なのか。

そもそも今日歩いた川越は本当に観光地と呼べるものだったのか。観光地のような観光もどきのようにも思えた。確かにそれでもそれなりに見どころがあって面白かったとは思うが。

これ以上考えても拉致があかない。ちょうどいいタイミングで川越ラーメンが来た。

普通のラーメンだ。スープも麺も特徴なし。薩摩芋の素揚げが入っている。これが川越ラーメンの川越たるどころか。川越といえば芋だが、別に芋が豊富に取れるわけではない。何より、さつま芋はあんまりラーメンに合わない。

芋ついでに紫芋が入った紫の餃子に至っては川越から沖縄になっている。でもこちらは悪くない。どこでもいいラーメン屋のラーメンと餃子はそれなりにうまい。

川越ラーメンか。こんなもので観光地というのもなんとも可笑しい。いや、観光地だからこういうものなのか。

ほんとの川越なんてそんなもんだ。そう思うと、川越ラーメンの芋の素揚げが少しだけうまく感じた。ただの芋の素揚げだ。味はない。

「うまいっすねえ」

そう言いながら古川は麺をすすった。こいつのバカは気を抜かしてくれる。案外こういう奴が一番人生というものを知っているのかもしれない。

そう思いながら、俺はラーメンに合っていない芋をさっさと口に入れて片づけた。

芋がなくなったが、これは川越ラーメンだ。